

6/30(火)「チャペルアワー」

奨励者:手塚貴晴さん(建築家・東京都市大学教授)

聖書:「新約聖書、ヨハネによる福音書 3 章 16 節」

本日のチャペルアワーには、建築家の手塚貴晴さんをお招きしました。手塚さんは、本学の新木造校舎の設計者です。代表的な建築に、ウッドデッキの屋根を園児が走り回る、立川市の「ふじようちえん」があります。その他にも多くの建築作品で受賞歴があります。日本人としては、極めて早い時期の 2014 年 9 月に TEDtalks. に登壇し「The Best Kindergarden you have ever seen」の題で語っています。

手塚さんは、さまざまな建築物の設計に携っています。教会や寺院などの宗教関連施設では、それぞれの教義や作法を尊重し、どういう建物が求められているのかを模索するのだそうです。学校や公共の施設などでは、使う人のことを第一に考えて設計し、その際、何かに偏重することが無いようにつとめているのだそうです。「建築物をつくるうえで大切なことは、箱ではなく中身である」、という言葉にその考えが現れています。

そんな手塚さんのもとに、孤児院の建て直し建設の依頼が来ました、場所はヒマラヤ山脈の麓、ジャムツツェ・ガツツアル孤児院(Jhamtse Gatsal Children's Community)、『Tashi and the Monk』というドキュメンタリー映画にもなったところです。手塚さんは設計だけでなく、資金集めや賛同者探しにも奔走し、新しい施設の建築計画を実現すべくあれこれサポートしたのです。

手塚さんは語りました、「そこは 100 人以上の子どもが身を寄せる孤児院です、笑顔にあふれ、みんなが生き生きと走り回っています。この孤児院は 90%が大学に進学するという、驚くべき教育レベルの高さです。創設者である僧侶のロブサン・プントソクが、導いたと言われています。その根本は特別なことではありません、年長者が年少者を教え、それぞれが互いに教え合い、与えあうことで高めあっていた結果なのです。聖書には 2 匹の魚と 5 つのパンが、5 千人を満たした話があります、みんなが支え合い、助け合うという精神の大切さは、宗教を問わないでしょう。とかく現代の教育は、残念ながら、人より少しでも上回ろうと出し抜く、言うなれば【奪いあい】が行われています。この孤児院の出来事は、聖書の例えのごとく、【誰かに与える、差し出すことで自らも恵みが与えられる】ことを証明しています。」

その後、手塚さんを囲んで、湯浅康毅理事長、高山学長、臂先生の四者でディスカッションの時間となりました。話題は、現代の社会の変化による家族のあり方、居場所づくりの大切さ、ボランティアの本来の意味、昨年度の 12 月にチャペルアワーでお招きした奥田知志牧師の活動など、多岐に渡りました。

最後に質問の時間を設けました。質問者にはご褒美として、手塚さん執筆の著書が手渡されました。些細なものと考えていた、身近な事柄が、社会を動かすほどの大きな活動につながることを学びました。手塚さん、貴重なお話をありがとうございました。